

十字路

大人数が関わる意思決定では代表を選び議論を委ねるのが古くからの知恵だ。それは生徒会でも立法府でも変わらない。複雑な問題では専門家が補佐に入る。もっとも、専門的になり過ぎると知識や役得の囲い込みが生じ、ポピュリズムのような反動が起きる。昨今、専門家に支えられた代表制はやや旗色が悪い。筆者が仕事で関わる企業年金の世界では、何にどう投資するかを方針書に定めるが、その内容は通常、労使が絡む代議員会や理事会で承認する。数理計算や投資分析とい

危機管理、ロハティンの場合

った専門領域は金融機関やコンサルタントが助言するから、典型的な「補佐付き代表制」だ。現場の人々は時に形式的だと自嘲するが、総じて昔ながらの代表制が機能しており、郷愁すら覚える。

真価が問われるのは危機の時だ。「フェリックス・ロハティン自伝」では1970年代、財政破綻寸前のニューヨーク市を救うべく奔走する投資銀行家ロハティンの姿が描かれる。以前に証券業界の連鎖破綻を食い止めた手腕が買われた。

財政悪化の原因は不況や金利高だけではない。市職員数が膨らみ組合が票田になると、市長の財布のひもはおおずと緩む。各党派が役職を競

い合つうちに再建策は先送りされ、やがて銀行が手を引く。関係者に等しく苦い薬を飲まなければならないロハティンは、まず超党派の独立機関を設け人ではなく制度に信頼を宿らせる。綱渡りの資金繰りをしのぐために公債を発行し、反目する職員組合の年金基金にも投資を頼みこむ。

対立した状態は不測の事態に弱い。主人公は党派を超えて食事を共にし、対話の回路をつなぎ、最後の瞬間に代表同士で妥結する。この人間臭さはSNSとポピュリズムが覆つ現代ではおとぎ話だが、危機管理のモデルとしては今なお有効だろう。

(タスク・アドバイザーズ

社長 眞保 二郎)